The girl who does a trip

クロネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔｈｅ　ｇｉｒｌ　ｗｈｏ　ｄｏｅｓ　ａ　ｔｒｉｐ

【Ｎコード】
Ｎ３８２７Ｏ

【作者名】
クロネコ

【あらすじ】
各地域を旅をする謎の少女。
彼女の目的は　何なのか？
古くから語り継がれた物語は　ただの伝説なのか　それとも実在したものなのか？！
ふと思いついた内容を物語りにしてみました。
グダグダした内容ですので　突然　話の内容が変わってしまうかもしれません

プロローグ（前書き）

最初は　物語が展開される世界で語り継がれた物語から始まっています

プロローグ

昔　昔　自然に見守られた　名も知られぬ小さな国があったそうです

この国には　とても珍しい髪と目の色を持った姫君がおられました

姫君は　自分の立場を威張り散らす事もなく　とても心優しい姫君だったそうです

彼女には　同い年の兄がおりました

彼は　次に国を担う跡継ぎとして　申し分のない責任感を持っていたそうです

2人の両親である国王と王妃に人望がなかったわけではありませんが　姫君と王子の周りには　それは優秀な人材が集まっておりました

誰もが　姫君を慕い　大切に想っていたそうです

国民は　まだ若い彼等の仲睦まじい姿を見て　未来に希望を持っていたとか

ある日　姫君に縁談が舞い込んで参りました

これは　とても名誉あることで　古き時代から続く大帝国の王太子

妃にという話です

何でも　お忍びでこの国を訪れていた王太子殿下が　孤児院に慰問してきていた姫君を見かけたとか

この時に見た　何気ない笑顔に一目惚れしたらしい

その話を聞いて　誰もが　姫君の幸せを願いました

王宮でも　帝国へと継ぐための準備が進められ　国中が　お祭り騒ぎとなったそうです

誰もが　この結びつきを国と国の親交を強めるものではなく　純粋な想いとして受け止めておりました

けれど　それを面白くないと思う者もいたのです

それは　王太子妃になると夢見ていた他国の姫君や令嬢達……

帝国に取り入ろうと目論んでいた　貴族達……

名も知られぬ小国の姫君に　その座を奪われたと聞いて　大層　怒り狂ったとか

彼等は　姫君だけでなく　その国の王族を含めた　王族にも憎悪を募らせました

この結果は　とても残酷な悲劇を齎(もたら)せたのです

狂った歯車は　どこまでも　どこまでも続く

狂気に満ちた感情は　時として　人を邪悪な存在に変えてしまう

小国は　帝国の迎えの使者が訪れた時　跡形もなく消えておりました

後に残されたのは　残虐的な痕跡のみ……

何が起こったのかは　誰にもわからないまま

王太子は　妃に迎えるはずだった姫君の祖国の変わり果てた様子に

言葉を失ってしまったそうです

そして　慰霊碑を建てました

いつまでも　姫君の事を忘れないと誓って……

王子は　その後　世継ぎがたった1人という事もあり　他国の姫君

を妃に迎えたそうです

けれど　その心の中には　いつまでも　姫君の存在があり続けたとか

※～※～※～※～

「どうしました？先ほどのお話　お嫌いでしたか？
これは、古くからこの国だけでなく　各国で語り続けられている物語ですが」
１人の女性が　不安そうな顔で　膝を抱えて黙り込んでいる少年に声を掛けた。

「嫌いではない……ただ　納得がいかない。
1人の女性を忘れないと誓っておきながら　違う女性を妃に迎えているではないか。
僕は　そんな風にはなりたくない。
誰かを想い続けるのならば　その意思を貫くべきだ」
「仕方がありませんよ、殿下……。
王族には　王族にしか出来ない定められた役割があるのです。
新しい世代に続く　後継ぎを世に送り出さなければならない」
その言葉を受けて　少年は、面白くなさそうな顔になる。
「だけど　僕は、それに抵抗するつもりだ。
次期国王は、兄上に決まっているのだから　気楽にやらせてもらう。
王族に生まれた以上　何かに囚われるかもしれないけれど……まだ時じゃないんだから」
「殿下は、本当に先のことを考えられていますね？
うちの子供達にも言い聞かせたいところです」
ニッコリと微笑む様子に　少年も、クスリと笑った。
「あいつらにとっては、耳にタコだろう。
だけど　後先考えずに行動しなくなったら　逆に気持ちが悪いぞ？
あれが、あいつらしいんだから」
女性は、小さく溜息をついて　”それもそうですね？”と　微笑んだ。
「さぁ～てとッ！今日は、もう寝るッ！
明日は、あいつらと一緒に　城下に下りる約束をしているんだ」
「また……殿下達は、どうしてそんなに。
それに　わざわざ　わたくしに話されなくてもよろしいのでは？
まぁ　王宮が大騒ぎになる事はありませんけれど……」
「父上達も諦めておられるんじゃないか？
まぁ　乳母（ナニー）のお前が叱られなくて何よりだ」
天使の如く笑顔を向けてこられて　女性は、何も言えなくなってしまったらしい。

「最初にお会いした時よりも　子供らしくなられて何よりですわ。
けれど　無茶だけは　なさらないように」
寝息を立て始めた少年に囁くと　女性は、ゆっくりと部屋を後にした。

※～※～※～※～

ある時　1人の少女が旅をしていると噂が流れた

その姿は　あまりに儚げで　とても弱々しい

けれど　彼女が赴いた周辺地域では　不思議な話が語り続けられていたそうだ

――　少女は　神が遣わした使者なのかもしれない　と　――

彼女と遭遇した人々は　様々な喩(たと)えで熱弁(ねつべん)する

――　困っているところを　あの子が助けてくれたんだッ！　――

――　何に対しても　一生懸命な子だったなぁ～？　――

けれど　逆に畏怖も含まれているのは　間違いないだろう

なぜなら　彼女の髪の色と瞳の色は　古くから語り継がれてきた物語の中に登場する姫君と同じなのだから

少女の正体は　誰も知るよりもない

だが　何とか知ろうと目論む者も少なくなかった

けれど　そうやって彼女がいるであろう場所に足を運んだ者は　戻ってくると憑物が落ちたかのように　別人となる

ある家族や民を省みらなかった好色家な若き領主は　それはそれは素晴らしい人徳者に

ならず者の凶悪な傭兵は　周りから慕われるほどの勇敢な軍人に

旅をする少女の正体は　結局　誰にもわからずじまいだ

プロローグ（後書き）

読みにくかったかもしれませんが　少しずつ更新していくのよろしくお願いします

第一章

陸続きの大陸に位置する古代から続くある国では、他国とのいざこざによって　戦いを引き起こしてしまった。

始まりは、些細(ささい)な出来事だ。

何も知らない子供が、隣国からお忍びで訪れていた王族の所有していた馬に触れた。

ちょっとした　好奇心だったのだろう。

けれど　相手が悪かったのかもしれない。

馬の持ち主は、自国での有名な傲慢な性格の持ち主である王太子だったのだから。

子供は、無残な姿で晒(さら)し首にされ　その親族までもが犠牲に……。

しかも　それだけでは終わらずに、無関係な者達も　無断に家を踏み荒らされ　男は、負傷させられ　女は、男達の欲望の捌け口に。

さすがに　罪のない者までもが命を奪われたのだから、黙ってはいられない。

その結果……互いに軍を率いて、国境付近で睨み合いが始まった。

最初に問題を起こした王太子は、自分の仕出かした事など棚に上げ

てしまい　相手国の討伐(とうばつ)に名乗りを挙げるように国中に呼びかける。

けれど　誰もが、自らの意思で立ち上がろうとはしなかった。

昔は、国の為に戦うべく立ち上がる者もいたにも拘(かかわ)らず　今回の戦争は、誰の目にも向こうに非がないことは明らかなのだから。

この事態に対して　王太子は、痺(しび)れを切らせた。

そして　単身で敵の下へと乗り込み、呆気なく死んだ。

この結果　ずっと王宮の奥で隠されるように育っていた第二王子が、新たな王太子となる。

そして　更に時は、過ぎていった。

些細(ささい)な出来事から始まった戦争は、その後　数年にも及ぶ　他の国々をも巻き込む大きな戦争へと発展してしまう。

これによって犠牲となる命は、数え切れない。

再び　血の海で世界が混沌(こんとん)の中で絶望に引き込まれていく。

※～※～※～※～

ある国境に近い村では、長きに続く戦争で食料が不足がちになりながらも　懸命に生き延びようとしていた。
そこへ　旅の途中だと言う少女がやって来る。

「こんな物騒な中で1人で旅をしているだなんて　アンタ……無茶だよ」
村で一番の世話好きだと自称する未亡人のマチルダは、か細い少女の姿を目にして　溜息をつく。
その反応に　少女は、思わず肩を竦めた。
「最初の頃は、自炊するのに手間取ったりしたんですけど　最近では、野宿にも慣れてきたところなんですよ？
それに　この旅には、話せませんけど　理由があるんですから」
少女は、ニッコリと微笑んで　被っていたフードを脱ぐ。
「だけど　不思議だねぇ～？
アンタ……まるで　子供の頃に噂で聞いた　物語の中のお姫様に似通った＜旅をする少女＞じゃないかい？
だとしたら　理由を失ったにも拘らず、戦争を続けている連中の心を入れ替えさせて欲しいんだけどね？」
マチルダの言葉に　少女は、クスクスと笑った。
「何を言っているんです？
こんな容姿の私が、どうしてお姫様になるんでしょう？
髪の色だって　元の色が、旅をしている中で魔術と魔術のぶつかり合いで巻き起こされた瘴気でこんな色になっちゃっただけなんですよ？」
呆気ない答えを聞いて　マチルダは、残念だというようなリアクションを見せる。
「だけど　気を付けないといけないよ？
今は、髪の色が変化するだけで済んでいるかもしれないけど　異形に変わり果ててしまうかもしれないんだからね？
この村では、まだ出ちゃいないけど　隣村では、昨日　3人目が出たらしいんだから……」
「ったく……国王陛下は、何を考えておられるんだかッ！
俺達が、血の涙を流しながら働いているっていうのに　自分達は、高みの見物だ。

元々　戦争の発端（ほったん）になる理由を作ったのは、あの傲慢（ごうまん）な元・王太子サマだっていうのにな？！」
その声に振り返ってみると　マチルダに容姿の似た青年が、悪態をつきながら、家の中に入ってきた。
傍らには、心配そうな顔をしている女性と幼い男の子を連れている。
「あまり　大きな声では、言わない方がいいわ？
どの国でも　国民は、王族や貴族の盾という認識しか持たれていないんだから。
しかも　最初の軍の募集の時に、誰も名乗りを上げなかったことで　その王太子サマが単身で敵軍に突っ込んで、死んでしまったんでしょう？
その経緯もあって　特に息子を失った陛下は、国民を恨んでいるって話よ？」
「こらこら　お客さんの前で、喧嘩するんじゃないよ？」
マチルダは、呆れたように　苦笑した。
「お義母さん……お客さんって、こんな戦争中に見ず知らずの外から人を家の中に入れちゃったんですか？」
幼子を抱き上げて　女性が、首を傾げる。
青年も、どこか疑いの目を向けてきているらしい。
「私が、大丈夫だと判断したんだよ。
2人とも、失礼だろ？
お譲ちゃん……こっちの娘さんは、上の息子の奥さんのチェルシーとその息子のテリー。
上の息子のディックは、軍の年齢基準に入っちまって……今年から戦争に駆り出されてしまっているんだ。
で　こっちの難しい顔をしているのが、下の息子のヴィクターだよ。
図体だけは、大きくなっているけど　まだ12歳なんだ」
マチルダに説明されて　少女は、深々と頭を下げた。
「初めまして、色々な地域を旅して回っているもので。
ティナといいます」

優雅な仕草に　一同は、一瞬　戸惑っていたが　我に返ったように、
同じような礼を取る。

2

「やっぱり　いいとこのお嬢さんなんじゃないの？」
マチルダは、真剣な表情を浮かべて　呟いた、
チェルシーとヴィクターも、キョトンとした様子で　頷いている。
反応していないのは、まだ幼いテリーだけだ。
「そんな事ありませんよ。
ただ　挨拶は、人としての礼儀の１つですから」
満面の笑みを浮かべて語るティナに　３人は、呆気に取られてしまっているらしい。
少女は、そんな彼らの反応に　苦笑気味。
「旅をしているそうだけど　村（ここ）へは、外のアレが原因で立ち寄ったの？」
チェルシーの質問に　ティナは、窓から外を見つめて　”ええ、そうなんです”と　小さく溜息をつく。
その視線の先には、武装した集団が声を張り上げて隊列を組んでいた。
何でも　近くの村が、隣国の軍に占拠（せんきょ）されたという報告を受けてやって来たらしい。
このままでは、この村が戦争の本拠地となってしまうだろう。
王都からは、色々と物資が支給されているらしいが　しばらくの間は、近くの村や町から食料や武器を調達する事になっているとか。
「うちの主人も、偶然にも　あの集団の中にいるのよ。
さっき、村のみんなと一緒に給仕に行ってきた所なんだけど　あれを仕切っている隊長各のシンっていう男の態度の悪い事ッ！」
「聞いた話じゃ　前の王太子殿下の乳母兄弟なんだってさ。
同じように育った仲だから　陰湿（いんしつ）な性格もソックリらしい」
憤慨している義姉の言葉に賛同しながら　ヴィクターは、１２歳と

は思えない大人な発言をする。
「本当に最低な男だと思うわ？！
だって　私も含めた女の子達を嫌らしい目で見てくるんだもの。
亡くなったとはいえ　元・王太子殿下の側近だったから　他の騎士の人達も強く言えないみたい。
あの隊長を抑えられるとしたら　今の王太子殿下くらいなんでしょうね？
だけど　今は、他の事でゴタついてしまっているらしくて　町の方に側近の方々と一緒に早馬で向かっている最中らしいわ。
絶対に　そうなるように仕向けたんでしょうけど」
嫁と息子の会話を聞きながら　マチルダは、深く溜息をついた。
「あんまり　危ない事に首を突っ込むんじゃないよ？
それでなくても　王族と関わる軍に逆らって　敵軍に襲撃されたと偽って襲われる事は、最近じゃ少なくないんだから。
特に　その隊長が滞在した村では、何かと表沙汰の出来ない被害を被っているんだ」
その言葉を聞いて　義姉弟の顔が険しくなる。
「それは、向こうの軍の人達も同じ感じですね？
自分達は、国の為に戦っているのだから　って、何かと偉ぶっているんです」
ティナが溜息をつくと　マチルダ達は、顔を見合わせてしまう。
「アンタ……実は、これまでに危ない目に遭ってきたんじゃないかい？
年齢は、ヴィクターの実年齢くらいのようだけど」
マチルダの視線が、ティナの足から頭まで向けられた。
身長は、１５０？あるかないかで　顔も童顔だ。
長く伸びている髪は、三つ編で高くポニーテールにされている。
「う～ん　実際年齢よりも幼く見られがちなんです。
実は、既に成人していまして……多分　チェルシーさんよりも年上なんじゃないでしょうか。

旅を始めてから　既に１０年以上経過していますし」
ティナの発言に　３人が、同時に信じられない　と　大声を発した。
「毎度毎度、説明するのが面倒なんで　年齢を見た目で判断しないで下さいね？
まぁ……この外見のお陰で　余程の物好きでない限り、変な目で見られることもないんですけど」
ニッコリと微笑む少女に　マチルダとチェルシーは、気の毒そうな視線を向けてきていた。
そして　ヴィクターは、何かショックを受けてしまったかのように　固まってしまっている。
「チェルシーって　兄貴よりも年上なのに……それよりも年上って　いくつなんだよ？」
義弟の発言が耳に届いたのか　チェルシーは、姑に息子を預けて青年を拳骨で殴った。
その衝撃音は、相当なものだ。
年齢の話は、彼女にとって　禁句となっているらしい。
「だけど　そこまで外見が幼いのって不思議なもんだねぇ？
そういえば　前に違う世界から流れてきたっていう人は、こっちじゃ子供にしか見えないって死んだ私の祖母さんに聞いたことがあるんだけど」
首を捻っているマチルダの言葉に　チェルシーと何とか立ち直ったらしいヴィクターが飛びつく。
「それって、異世界から飛ばされてきた人の話ですよね？
確か　前の戦争の時にも召喚する儀式が行われたけど、失敗したって……」
「何かと露見しないように緘口令を敷いているらしいけど　誰もが知る話題だよな？
まぁ……その召喚の儀式に参加していた　とある領主の放蕩息子が、それまで全く興味を持っていなかった立場を意識し始めて　その上　奥方も娶ったって噂で聞いたけど」

2人の話を聞きながら　ティナは、苦笑する。
「こっちの地域じゃ　噂が変わっているようですね？
その召喚の儀式は、成功していますよ？
でも　神官の代理を務めていた　貴族のご子息と恋仲になって　無理強いできなくなってしまったんです。
今は、お子さんも生まれて領地で幸せに暮らしていると　私も風の噂で聞きました。
最初は、自由主義だった旦那さんも　今じゃ、素晴らしい御領主になられているそうです。
元々は、王族の許可なく行った儀式だったらしく　お咎(とが)めもなかったそうですし。
今の王太子殿下も　ご友人が幸せになったことに胸を撫で下ろしながら祝福されたそうです」
まるで　知っているかのように語る少女に　3人は、言葉が見つからない。
「えっと　ティナは、色々と世界を知っているんだねぇ？
やっぱり　旅をしていると　普通は知れないような話を耳にする事が出来るってことなんだろうか？」
マチルダの問いかけに　少女は、クスクスと楽しそうに笑う。
「旅は、色々な異文化を知るのに手っ取り早い方法ですからね？
今までの経験は、確かに危ない事もあったかもしれませんけど　その出来事さえも後悔しない出逢いもあったんですよ。
人の心は、近くにいすぎるとわかりにくいんです。
だから　ちょっとした出来事で、離れたり歩み寄ったりする」
「うん……そういう話を聞いていると　ティナって、私よりも年上なのね？
何だか　自分の限度を知った上で、発言や行動をしているような気がする」
チェルシーは、考えれば考えるほど疑問が浮かび上がってきているらしい。

和やかな空気が、流れ出したと思うと　家の外から騒がしい声が聞こえてきた。
一同は、何事かと顔を見合わせる。

3

「どうしたんだい……そんなに慌ててさ？
そんなに叩かなくたって　すぐに出るよ」
マチルダは、扉に向かいながら　呆れた声を発した。
「どうせ　リリーが、旦那さんと喧嘩して　相談しにきたんだろ？
一昨日だって　朝までグダグダ言いにきて……結局は、旦那のブライアンが迎えにきていたし。
うちは、駆け込み寺じゃないっていうのに……」
ヴィクターは、呆れたように　溜息をつく。
ティナが、不思議そうに首を傾げていると　チェルシーが、教えてくれた。
「リリーは、私やディックの幼馴染のブライアンと最近　結婚したばかりの奥さんのこと。
ブライアンは、元は王宮に仕える近衛兵だったんだけど……今は、怪我で療養中で　新婚な奥さんを連れて　実家に戻ってきているの。
詳しくは、聞いていないんだけど　亡くなった前の王太子殿下付きだったらしくて　ちょっと　立場が微妙になってしまっているらしいわ？
リリーも　王宮にいたそうなんだけど……あんまり話してくれないの。
まぁ……ブライアンが選んだ人だから　悪い人じゃないと信じているんだけどね？
話ができるんなら　秘密の末のリリアーヌ姫様の話とか聞きたいのに……」
「リリアーヌ姫様って　確か　王宮内で隠された姫君のことですよね？
旅をしている中でも……話だけでも窺ったことがあります。

色々と悪意のある内容も含まれているようですけどね？」
ティナは、苦笑したように　言う。
「ブライアンの話では、とても素晴らしいっていうことなんだけどね？
まぁ……今は、奥さんをもらったから　他の女性を褒めちぎるなんて出来ないでしょうけど」
「そういえば……ブライアンの奴　何かさっき、手紙を受け取るなり　村を飛び出していたぞ？
何があったのか　顔を真っ青にさせてさ？」
義姉の話に相槌を打っていたヴィクターは、そう言って　首を捻る。
「もしかしたら　リリーは、置いてきぼりを食らったことで相談に来たのかも……」
チェルシーは、唸りながら呟いていたが　言葉を失ってしまう。
扉の開く音が聞こえて　何かの金属音のような響きが聞こえてきたのだから……。
「……ッ！
アンタ達、一体？！
何の権利があって、そんなモノを振りかざしてくるんだろうね？」
マチルダの声から、何か異様な雰囲気を感じ取って　一同は、扉の方に近づく。
扉の前に立っていたのは、武装した兵士だった。
顔は、仮面を被っている為にわからないが　身に着けている紋章から　階級は、そこそこだろう。
その後ろには、同じような格好をした兵士が数人　整列しているらしい。
纏っている空気は、明らかにいいものではなかった。
異様な緊迫感が流れる中　一番上の階級であろう兵士の1人が、口を開く。
「早く、出てくるんだッ！
他の連中は、既に広場に集まっているぞ？

これは、命令だッ！
抵抗するのならば　容赦せずとも良いというお達しを受けている！！」
厳しい一声に　チェルシーは、幼子を抱きしめ　ヴィクターは、兄の妻とティナを守るように前へと出る。
けれど　相手は、完全な大人の男性であり　訓練を重ねているのだ。
引き摺られるようにして　家の中から連れ出されてしまう。
広場へと連行されていくと　そこには、女性や老人に子供達が固まって抱き合っていた。

※～※～※～※～

「どうやら　揃ったようだな？」
兵士に引き摺られていくと　中央で高みの見物をしていたらしい人物が、声を発した。
視線を向けてみると　他の兵士と違って着飾ったような衣装を身に包んだ男が、ニヤニヤしながら　集められた人々を見つめている。
そして　ある女性に視線を止めた。
「これは、これは驚きましたな？
王のお戯(たわむ)れによってお生まれになった卑(いや)しい身分の姫君が、こんな田舎の村にいるなんて」
その発言に　その場にいる人々は、驚きを隠せない。
「リリアーヌ姫は、陛下の話によれば　乗っておられた馬車が崖から落ちたことで亡くなられたと窺っていたのですが？」
男は、顎に手を当てながら　”どういう事でしょうか？”と　笑みを零している。
皆から注目されている女性は、凛とした様子で　目の前にいる男を睨み返していた。

「嘘……リリーが、末のリリアーヌ姫様？！」
チェルシーが、我が子を抱きしめながら　息を呑む。
それは、彼女だけでなく　同じ村で生活をしていた者達も同じ反応だ。
ティナは、そんな皆の反応を見つめながら　冷静に事の展開を考えていた。
噂でしか知られていない　隠された末の姫の存在。
彼女の母親は、勿論のこと　その経緯さえも知られていない。
噂は、様々な推測を連ね　何が真実なのかわからなくなっている。
「まぁ……姫君が、生きているにしても他人の空にしても　関係ない。
お前達には、差し出してもらわなければならないものがある」
その言葉を受けて　皆が、ビクリと体を震わせた。
「第一に　食料をもっと差し出してもらおうか。
お前達は、守られる立場なのだから　少し食べるものが減っても文句など言えまい。
第二に　夜伽（よとぎ）で呼ばれたものは、刃向かうな。
我々は、数え切れない極限状態にある。
最初の理由と同じく　拒否権はないぞ？」
その言葉を受けて　村人達の顔から希望が一切消え去り　絶望だけが残る。
「馬鹿馬鹿しい」
静まり返った広場に　少女の声が響き渡った。

4

「小娘……今　何と言った？」
男は、険しい表情を浮かべて　初めてティナに視線を向けた。
見た目は、普通に子供にしか見えない為　論外（ろんがい）と判断していたのだろう。
けれど　その少女の発した発言に　怒りを覚えたらしい。
「何と言った？
貴方は、頭だけではなく　耳も悪いのですね？
私は、馬鹿馬鹿しいと言ったんです」
何の躊躇（ちゅうちょ）もなく断言する様に　村人だけではなく、隊長に仕えている兵士達も開いた口が塞（ふさ）がらない状態だ。
そして　当事者である　無謀な発言を続けている少女と怒りで顔を真っ赤にさせている元・王太子の側近だった男を見守っている。
「戦争の発端となる原因を作ったのは、何を隠そう　貴方の乳母兄弟だったのでしょう？
本来ならな　その方の間違った行いを正すべきだったのは、隊長殿だったのでは？
それなのに……貴方は、ご自分の立場を利用して　国民を苦しめるだなんて。
私は、ずっと旅をしてきましたが　貴方方軍には、王都より　緊急事態に備え、食料や武器が支給されていると窺いました。
それなのに　滞在先にて　食料を求めるのですか？
しかも　自分たちの欲望の為に、女性を寝所に入れようとするだなんて　最低だと思わないんですか？！」
反論を許さないように一気に言い放ったティナに　男は、怒りに任せて立ち上がった。
その手には、剣が鞘（さや）から抜かれている。

まるで空気のように見守っていた村人も他の兵士も、息を呑んだ。
「たかが　旅の小娘に　そんなことを言われる筋合いなどないッ！
叩き斬ってやる！！」
隊長は、そのまま剣を片手に振り上げ　ティナに襲い掛かった。
数人の女性が、目の前に起こっている光景に悲鳴を上げ　子供達も、
顔を真っ青にさせながら抱き合っている。
けれど　次の瞬間　男の姿が一瞬にして　消えていた。
驚いて視線を下に向けてみると　隊長は、剣を手にしたままの状態
で　地面に叩きつけられている。
誰もが、言葉を失ってしまっていた。
勿論　地面とお友達になっている男もだ。
「力任せで攻撃を仕掛けてくる時点で　無能な男の印ですよ？
武術には、様々なものがあって　中には、相手の力を反対に自分側
に引き込む方法があるんですから」
ティナは、ニッコリと微笑む。
他の兵士達は、上司が簡単に倒されてしまった事実を受け止められ
ずにいる。
「間違っていることを、正そうとしないだなんてッ！
こんなの　上下も関係ないのに……。
戦争中は、たとえ王族だって　一兵士として、命を賭けて戦うもの
なんじゃないんですか？
それを　自分の立場を利用してッ！
上の指揮を取っている人も、相当　馬鹿な人なんでしょうね？」
「ほぉ？
その発言は、聞き捨てならないな？」

※～※～※～※～

「おい……今の動き、見えたか？」

青年の問いかけに　後ろに控えている面々は、目の前に見える光景を見つめたまま　呆然と首を振った。
「驚いたな……この俺にも見えない速さで、あいつを投げ飛ばすだなんて」
どこか興味を持った様子の主に対して　皆は、顔を見合わせてしまう。
「あんまり　戯(たわむ)れた考えを持つなよ？
それだけでなくとも　お前の立場は、微妙なものになっているんだからな？
一部の噂じゃ　お前が、あの方を陥(おとしい)れたと言われているんだ。
そんな中で　あんな公衆の面前で、あの方の側近を辱(はずかし)めた張本人を重宝(じゅうほう)でもしてしまったら……どうなる？」
「ああ……それは、母も心配していたわ？
今回の一件を利用して　主力交代を目論(もくろ)んでいる連中がいるそうなんだもの」
低い男の発言に対して　ハスキーな女の声が、返される。
「お前達は、俺を信用していないのか？
あの好色な狸親父と違って　あんな子供を相手にするはずがない」
溜息をつく青年に　顔を隠した人物が、”それにしても……”と
　思案するように呟いた。
「あの少女……誰かに似ている気がするんですよね？
どこかで会ったような……」
その言葉に　一同は、おいおい……と　苦笑気味。
「殿下……皆様方　今は、暢気(のんき)におしゃべりしている暇などありませんッ！
我妻の正体が知られてしまった以上　厄介なことになってしまうことは、間違いないのですから」
足を少し引き摺った男が、何度も広場に視線を向けながら　顔を歪めている。
「ああ……ごめんなさいね？

ディック……貴方の家族や友人も、あの場に連れて来られているんだっけ？」
女が、息をついて　片に背負っている弓を下ろし、矢の準備をし始めると　少女の甲高い声が、一行のいる場所にまで響き渡ってきた。
『間違っていることを、正そうとしないだなんてッ！
こんなの　上下も関係ないのに……。
戦争中は、たとえ王族だって　一兵士として、命を賭けて戦うものなんじゃないんですか？
それを　自分の立場を利用してッ！
上の指揮を取っている人も、相当　馬鹿な人なんでしょうね？』
この発言を耳にして　青年は、眉根を寄せる。
そして　仲間に一瞬だけ視線を注ぐと、そのまま大きく叫んだ。
「ほぉ？
その発言は、聞き捨てならないな？」
感情に任せて姿を晒した主に対して　皆は、深く溜息をつく。

5

背後から威圧感のある声が聞こえて　一同は、一斉に振り返った。
その視線の先には、身軽そうな足取りで塀(へい)の上から飛び降りてくる青年の姿が。
彼は、金髪にエメラルドグリーンの瞳を持った美形だ。
兵士達は、その人物の姿を確認するなり　ハッとしたように　隊列を組んで　敬礼し始める。
金髪の青年の後ろには、護衛らしき数人の下級兵士とは違った服装の者達も続く。
ティナのすぐ後ろに控えているマチルダ達と彼らが守るように呆然としているリリアーヌが、その中にいる人物を見つけて　息を呑んだ。
おそらく　４人の視線の先にいる人物が、チェルシーの夫で　マチルダの息子であり　ヴィクターと同じだが　母親に顔立ちが似ている弟と違い　彼は、父親似なのかもしれない。
「お嬢さん……今の発言は、王族に対しての不敬罪と問われてもおかしくないと　わかっているのかしら？」
女性にも拘らず　騎士の装いをした端整(たんせい)な顔立ちの騎士が、ニッコリと微笑みを浮かべた。
なぜかはわからないが　先ほど　地面に叩き付けられた男よりもこの女性の方が、恐ろしいと感じてしまう。
それは、先ほどまで我が物顔だった兵士達も同じようだ。
格好よく塀の上から真っ先に飛び降りてきた青年は、どこか溜息をついてしまっている。
他のメンバーも、苦笑気味……。
「不敬罪の意味を間違っておられませんか？

元々　悪いのは、こんな手癖（てくせ）の悪い人を監視もつけずに好き勝手させている上の責任です。
何の落ち度もないのに　それを嘲笑い侮辱することが、不敬罪に問われるのではないでしょうか？」
物動じない口調で話すティナに　驚いたのは、彼女以外の人々だった。
誰もが顔を蒼白にさせて　次の展開を見守る。
ただ　先ほどの女騎士と数人の騎士は、面白いものを見つけたかのように　興味を持っているようだが。
「いくら　この国の礎（トップ）である国王陛下の命令とはいえ、今回の戦いだって　それ相応の謝罪の意を相手国に見せ　和平を結ぶのが互いの国にとっても　利益があると思いますけど？
自分勝手な我儘（わがまま）王子の残した厄介な遺産を相続する義務は、貴方にはないのでは？」
次に続いた　その発言に　青年は、眉根を寄せた。
「確かに全面的に悪いのは、兄上かもしれないが　見ず知らずの君にそこまで言われる筋合いはないだろう。
それに　この場に父上がいれば……間違いなく斬り捨てられていただろうな？
次の王位に最も付かせたかった息子を、侮辱されたのだから」
青年の返してきた言葉に　ティナは、小さく息を付く。
「馬鹿な子供ほど可愛いってことでしょうか？
本来では、王妃の一子である　貴方が王位を継ぐのに一番近いはずなのに。
寵愛を受けていた女性の息子だから　陛下は、過剰な愛情を注がれてきたのでしょうね？
そんな甘やかすだけの盲目（もうもく）な愛情でしか育てられなかったからこそ　自己中心的な性格が形成されたんでしょうね？
貴方の場合は、限られた空間の中であるべき教育を受けたからこそ　今の成長を成し遂げたのでしょうけど。

それは、周りの方々に感謝すべきですよ、レイナード殿下？」
自分の方が年上のはずなのに　まるで義姉が諭すように言い放つ少女に　青年：レイナードは、面白くなさそうな表情になる。
「驚いたなぁ～？
クラリス以外に　レイに対してそんな発言ができる人間が存在していただなんて」
1人の騎士が、面白そうに笑い出す。
「ジャック……笑っている場合じゃないよ。
サリヴァン殿下は、公じゃ　王妃様の第一子として発表されて　レイが、寵姫（めかけ）の息子とされている。
それなのに　あの子は、その隠された真実をごく当たり前に言った」
フードを被った青年は、呆れたように　今にも爆発するのではないかと心配そうに主を見つめた。
「だけど　巷（ちまた）じゃ……色々と入れ替わりについて、噂になっていたぞ？
まぁ……その悪意からは、いつも守られてきたんだけどな？」
ジャックと呼ばれた騎士も、笑いながらも　剣に力を入れているらしい。
「ケヴィンのように　深刻になるべきじゃないんだけど……。
あの子が、隣国の間者（スパイ）である可能性がないわけじゃないわ。
レイを相手にあれだけ　言い返すことが出来るんだし……只者じゃないのは、確かよ。
ここ最近　様々な地域で　不思議な髪の色をした少女が、色んなことに首を突っ込んできているらしいという報告を受けていたけれど……間違いなさそうよね？」
クラリスという名らしい女騎士も　弓矢を持ち直している。
「待ってくださいッ！
せめて……ブライアンが、戻ってくるまで待てませんか？
あいつ　カイン様の領地まで早馬で向かっているところなんですから」

ディックが、少し焦ったような声を出す。
その声に　マチルダとチェルシーにヴィクターが、顔を見合わせてしまう。
どういう会話なのかわからないが　この空気を一掃させてくれる可能性がある。
兵士達は、何が何だかわかわないという様子で　ザワつき始めていた。
最初こそ　無様(ぶざま)に地面に叩きつけられていたままの隊長の男も、苦虫を噛み殺したような顔で　ティナを睨み付けているようだ。
こんな大勢の人の目の前で　あんな醜態(しゅうたい)を見せてしまったのだから　仕方がないだろう。
「お前は、一体　何者だ？」
レイナードは、難しい顔をしたままで　ティナを見る。
そんな青年の様子に　少女は、ニッコリと微笑んだ。
「別に　深く考えることではありません。
私は、ただの旅人。
先ほどから話しているのは、今までの旅の中で耳にした話ばかりです。
世界には、もっと過酷(かこく)な国も存在している。
だからこそ　人々は、助け合うんです。
自分だけの考えではなく　誰かを守るためには、どうすればいいのか……。
それを考えて　行動するのが、王族としての一番重要な役割なんじゃないでしょうか」
ティナの凛とした声が、静まり返った広場に響き渡った。

6

「王子サマ？
彼女の言葉に同感だぜ、オレは」
その声に振り返ってみると　馬に乗ったままで近づいてくる一団の姿が見えた。
声を発したであろう男は、すぐに連(女)れを馬の上に残したままで　飛び降りる。
「何を膨れた顔をしているんだ？
本当のことを言って　どこが悪い？」
男は、フードを取ると　どこか意地悪そうな笑顔を見せ付けた。
「ブライアン……確かに　領地に向かってくれるよう頼んだ。
だが　こいつを連れて来いとは、言ってない」
レイナードの言葉に　ブライアンと呼ばれた大柄な男は、肩を竦めてしまっているらしい。
けれど　妻と友人一家の心配そうな視線を感じて　微笑む。
「話を聞いただけでは、詳しくは説明できないとおっしゃられたんですよ。
実際に実物を見てみないと　確証を持てないから……　と」
ブライアンは、見るからに　困り果ててしまっている。
「おいおい……こいつは、悪くないぞ？
俺が、無理やり付いて来たんだからな？
まぁ　マリアは、連れてきたくなかったんだけど　」
「あら……私は、何と言われようが　来るつもりだったわ？
もしも　連れて行ってくれないのだったら……ジェイミーに頼むつもりだったもの」
クスクスとフードを脱ぎ去りながら悪戯っ子のように舌を出す少女の発言に　男は、険しい表情になってしまう。
「あいつだけは、絶対に駄目だッ！

お前だって　あの男には、色々ととんでもない事に引き込まれたじゃないか。
元々　マリアが、あそこから出ないといけなくなったのだって　あいつの陰謀だったわけだし」
「あら？
あの事件がなければ　私は、一生を　神殿で過ごさなければならなかったんじゃないの？
貴方とも　出会うこともなかったことになるんだけど」
その発言を聞いて　男は、言葉を詰まらせてしまっているらしい。
「おい……夫婦喧嘩は、違う場所でやってほしいんだが？」
レイナードは、呆れたように　溜息をついた。
ハッとしたように　2人が、辺りを見回してみると　周りにいる皆も、何とも言えない様子で　顔を見合わせている。
「とにかく　娘……お前は、こっちに来い。
村の皆さん　ご迷惑を掛けました。
家に戻っていただいて　結構ですよ。
あの男が宣言していた提案は、無効ですから　ご安心ください」
王子の高らかに響き渡った声色に　人々は、嬉しそうに顔を見合わせた。
けれど　ティナと関わったマチルダ達は、気が気じゃない様子だ。
そんな家族の様子に　ケヴィンとブライアンは、何か戸惑いを隠せていない。

※～※～※～※～

ティナは、村の集会場に連れてこられた。

集まっているのは、レイナード殿下に側近や騎士達と先程　突如と

してやって来た目立つ容姿の夫婦。
後は、心配で付いてきてくれた　マチルダとリリアーヌだ。
「さて……本当のことを話してもらおうか」
レイナードは、少し低めの声を出す。
どこか威圧感のある様子に　マチルダは、息を呑み　リリアーヌも、神妙な表情を浮かべている。
ただ　当事者であるティナは、そんな空気に呑まれることなく　ニッコリと微笑んでいるだけ。
「ちょっと声色を変えただけで　相手が口を割るとでも思っておられるのですか？
私は、今まで旅の中で　様々な体験をしてきましたから……別に何とも思いませんよ？
あるとすれば　貴方の印象が悪くなるだけではないでしょうか？」
少女の発言に　王子の側近達が、吹き出すのを必死で堪えた。
そんな彼らの様子に　レイナードは、睨みつける。
「王子サマ？
彼女は、本当に一筋縄じゃいかないぞ？
俺だって　梃子摺ったんだからさ？」
カインは、ケラケラ笑いながら　当たり前のように受け取ったお茶を飲み干していた。
そんな夫の様子に　マリアは、溜息をついてしまっているらしい。
「ねぇ……あの後　どこを旅していたの？
貴女のお陰で　解決したのに……お別れの言葉も言わせてくれないまま　いなくなってしまっていたでしょ？
ずっと　貴女のことを探していたのよ？」
マリアは、黙り込んだままのティナの前に進み出る。
「あまり　目立ちたくなかったのよ。
それでなくても　変な噂が飛び交っていたし」
ティナは、どこか拗ねたように　呟く。
２人の会話を聞いて　マチルダは、不思議そうに首を傾げた。

「あんたらは、以前からの知り合いだったのかい？」
その質問を受けて　ティナは、肩を竦めたが　マリアは、背筋を伸ばして微笑んだ。
「申し遅れました。
私は、マリア……マリア―サカキ・シュワルツと申します。
ティナとは、ある一件で関わった大切な友人です」
「サカキ？
随分と変わったミドルネームだねぇ？」
マチルダは、目をパチクリさせながら　首を捻る。
マリアは、そんな疑問を持っている彼女に　”そうですか？”と
反対に不思議そうな顔を浮かべていた。
「ああ……こちらの世界では、珍しいのかもしれませんね？
サカキっていうのは、本当の意味じゃ　苗字（ファミリーネーム）に値するんですけど」
ニコニコと語る少女に　マチルダは、驚きを隠せない。
「アンタ……まさか　異世界から召喚された姫巫女サマだったのか？
フムフム　召喚の儀式に参加していたある領地の息子っていうのが、今の旦那さんだったわけだね？」
その言葉を受けて　マリアは、フフフと笑っているようだ。
「色々とありまして　巫女としての責務は、必要ないとのことなんですけどね？
権限だけは、生きているんで　時々　使わせてもらっているんです。
今回は、一番上の息子が、仕事を引き継いでくれているので　夫共々　こちらに足を運ぶことが出来たんですけど」
「驚いたなぁ～？
ティナ……アンタ　凄い人と知り合いだったんだねぇ～？」
ティナは、その言葉を受けて　何も答えない。
だが　レイナード達は、何かを待っているかの如く　沈黙を守っていた。

7

「待って頂戴？
だとしたら　何だか　おかしくない？
姫巫女様が召喚されたのは、１５年位前の話だもの。
いくら　外見が幼く見えても……その頃　貴女は、いくつだったのよ」
チェルシーは、真剣な表情を浮かべて　呟いた。
その発言に　マチルダとヴィクターにリリアーヌも、ハッとしている。
けれど　他のメンバーは、何か　察しが付いているらしい。
ただ　だからこそ　不安の色を隠せていない様子だ。
「こちら側にも　色々と事情があるんですよ。
まだ　確証のない段階なので　我々以外の面子（メンツ）に知られるわけにもいきません。
ですので　察して頂きたい」
クラリスは、厳しい口調で　言い放った。
そして　その間も　他の王子の従者達の視線は、椅子に座ったきり　黙り込んだままの旅の少女に向けられている。
「我々は、貴女に危害を加えるつもりなどありません。
ただ　今の状況では、貴女の存在そのものが　国を揺るがすものになってしまう可能性があるのです。
今……この国は、他国と戦争中であり　不審な者は、何の証拠もなく　死されるのが、当たり前となっているのですよ？」
丁寧な口調の顔を隠している　男は、ティナの前に膝をつく。
「おいおい……ケヴィン？
そんな遠まわしな言い方をしても　話すとは思えないぞ？
ここは、強気でいった方が……」
気性の荒そうな騎士の男が、呆れ返っている。

けれど　もっと　呆れているのは、女騎士のクラリスだった。
「お前のやり方は、一番　遠まわしなんだよ、ジャック。
話を聞いている間に　口説き出すでしょう？
彼女の場合は、そういう手に乗らないだろうけど　今までのことを考えると　　立場が悪くなるのは、間違いないんだから」
今にも取っ組み合いの喧嘩を始めそうになっている　２人に　王太子は、冷たい視線を注ぐ。
それを受けて　クラリスとジャックは、黙り込んだ。
「詳しい事情は、話せません。
今は、まだ　真実を語る時ではないので」
ティナは、そう答えて　再び　口を閉じてしまう。
何が何だか分からない面々は、顔を見合わせるしかない。
「話さないということは、肯定（こうてい）　と　取ってもいいわけだな？
ならば　お前の身柄（みがら）は、こちらで預からせて貰うぞ？」
レイナードは、そう言うなり　少女を無理やり立たせ　　腕を掴んだ。
ティナは、突然のことに目を見開いていたが　すぐに抵抗しようともがくものの　相手の男の方が、上手だったのか　動くこともままならなくなってしまう。
側近達は、危惧していたことを目の当たりにして　深く溜息をつく。
王太子のぶしつけな言葉とその行動に　マチルダとチェルシーは、信じられない気持ちだ。
リリアーヌも、不安そうに　ブライアンに視線を向けている。
「ちょっと　それは、聞き捨てならないね？！
どういう事情があるのかは、知らないけど　抵抗している女の子を、そんな風に扱うだなんてね？」
「その通りだわ？！
いくら　王太子殿下といえども　　その行動は、許されることではないものッ！」
母と妻の発言に慌てたのは、王太子側の事情を知っていると思われ

る　ディックだ。
「レイ王子……そんなに　彼女の監視が必要なら……我が領地に来賓(らいひん)として　迎えてもよろしいでしょうか？」
緊迫した空気の中に　陽のような温かな声が、響き渡った。
振り返ってみると　マリアが、満面の笑みを浮かべている。
隣に控えている　カインも、妻の提案に大賛成らしい。
「それは、いいな？
マリアの知人となれば　お前んとこの狸共も、下手に手を出せない。
うちの領地は、色々な他民族も移住しているから　詮索されることもないだろう。
変な噂に踊らされているのは、ティナ嬢だって　ごめんだろうしな？
何かあるんなら　王子サマの信頼できる　侍女でも送り込んでくれればいいことだし」
その言葉に　レイナードは、唇を噛んでいる。
王太子の心境を知っているのか　側近達は、顔を見合わせるばかり。
「だったら……私を侍女として　雇って頂きたいわ？！
どういう事情があるにしても　こんな風に関わった　ティナが、何かの策略に使われるのを心配するだけなんて　とんでもない事なんですものッ！」
チェルシーは、訝しげな表情を浮かべて　立ち上がった。
突然の宣言に　ディックは、目を剥いてしまう。
急いで　母に視線を向けるものの　反対するどころか　目を輝かせているのを目の当たりにしてしまい　嫌な予感が脳裏によぎる。
「さすがは、我が嫁ッ！
言わなければ　私1人ででも　そう叫ぶつもりだったんだよ。
私は、若い頃　王宮で下っ端だったけど　メイドをしていたしね？
料理だって　腕には、自信があるし……雇ってほしいよ」
「俺も、心配だから　一緒がいいな？
テリーの面倒は、ちゃんと見るつもりだし……力仕事とかは、任せてください」

弟の発言までも聞き　ディックは、その場で項垂れてしまっていた。
そんな男の様子に　仲間達は、同情するしかない。
「出来れば……リリアーヌ姫様も、ご招待したいのですけれど
よろしいでしょうか？
姫様の身の安全の為にも……」
マリアの言葉を聞いて　目を見開いたのは、ブライアンだった。
リリアーヌも、キョトンとしてしまっているらしい。
「忘れているかもしれねぇけど……さっきの騒ぎで　リリアーヌ
姫が生きていることが、バレちまった。
折角　見知らぬ土地で　頑張っていたところに悪いが　　あいつの
部下の中には、王が忍び込ませた　密偵もいる。
王の耳に入るのは、間違いない。
そうなれば　確実に　王宮に連れ戻され　前よりも　酷い扱いを受
けることになるぞ？」
カインの警告めいた発言に　ブライアンは、無言で頷く。
「わかった……カイン　２人のことは、頼む。
ディックとブライアンは、そちら側の警備の指揮を取ってもらう。
こちらからは、ミュリエルを侍女として送る」
レイナードの決定事項に　カインが、”げっッ！”と　嫌そうな顔
になった。
「あいつを、こっちに送るだと？！
俺んとこの領地を食料不足にするつもりか？
あの女の胃袋は、無限なんだッ！
確かに　護衛としても侍女としても　申し分ないかもしれない。
だ・け・ど　なぁ？
その他は、論外だッ！
あの破壊力で　屋敷の歴史ある　食器や壺（つぼ）が、破壊されたと思って
いる？」
「ならば　クラリスも付けよう。
ミュリエルの暴走を止められるのは、クラリスくらいだ」

レイナードは、そう言って　甲冑を身に纏った　女騎士を指差す。
「尚更　駄目だッ！
ミュリエルの被害は、なくなるかもしれないが　ジェイミーとの喧嘩の余波で　屋敷が大荒れになるじゃないか！！」
「あら……どうして　私がいくとなると　そうなることが、前提になるのよ」
クラリスは、納得がいかず　眉根を細めた。
けれど　ジャックは、大笑いしているし　ケヴィンも、含み笑いをしている。
そんな2人を睨み返し　女騎士は、若き領主を睨んだ。
「昔からそうだろう？
とにかく　送り込んでくるんなら……ミュリエルだけでいい。
被害は、なるだけ　少ないに越したことはないから」
カインの言葉に　マリアは、苦笑気味。
「殿下……あまり　夫を苛めないで下さい。
でなければ　ルゥさんに報告しなければいけなくなってしまいます。
殿下が、女性に対して　無作法な物言いと行動を取った　と」
それを聞いて　レイナードは、押し黙る。
「奥方……頼むから　ルーネットには、内緒にしてほしい。
すまなかったな　カイン。
送るのは、ミュリエルだけではなく　シエルもつけるつもりだ。
奴なら　ミュリエルの暴走を、最小限に抑えられるはずだから」
折れた　主の様子に　側近達は、微笑ましげに見つめているらしい。
ティナは、そんな展開を見つめながら　小さく溜息をついた。
結局　自分の意見さえも聞かれずに　決まってしまったのだから。
少女は、そして　胸元に輝く紅い石を指でなぞっていた。

閑話：とある　女の語り（前書き）

今までの本編に載せ損ねた　補足の為に語ってもらっているつもりです。

閑話：とある　女の語り

王宮の奥にある　離宮にて　女官長を務めている　わたくし　ルーネット＝シェルディン・リンゼルには、いくつかの悩み事があります。

それは、わたくしがお世話してきた　王太子殿下とその妹君のこと。もう１つは、わたくしがお腹を痛めて産み落とした　我が子達の将来のことだった。

わたくしが　初めて王太子にお会いしたのは、夫と生まれたばかりの我が子の洗礼を神殿にて行ったいた時。

あの時は、まだ　我が子が、次の王となる　王子に忠誠を誓い　最も　信頼される側近になるなどと　思いもしなかった。

それは、勿論　主人も同じことだっただろう。

あの頃の夫は、わたくしに対しても　子供達に対しても　義務感しか持ち合わせていなかっただろうし。

わたくしが、夫：ローレンス・リンゼルの元に嫁いだのは、わたくしが１５の頃だった。

ローレンスとは、ただ　跡継ぎを設ける為だけに　迎えられただけ。

彼には、わたくしの他に　愛する女性がいるのだから。

その方との間には、既にお子がいるそうだけれど　相手の方の身分が故（ゆえ）　妻に迎えることが出来なかったらしい。

だから　わたくしの存在理由は、妻とは名ばかりで　その方との関係と愛する女性との間に出来たお子を世間から知られない為の隠（かく）れ蓑（みの）。

そして　名ばかりの跡継ぎを産む事が、わたくしに課された役割なのだ。

この事を突きつけられたのは、淡い期待に胸を躍らされていた　初

夜の床で……。
あの時ほど　絶望したことは、なかったかもしれない。
家族と離れることに対しては、あまり　悲しみなど浮かばなかったのに……。
まさか　夜会で初めて会った時から　慕っていた相手に　そのような言葉を投げつけられるなどとは、思いもしなかったのだから。
わたくしの実家は、古来より王族に仕えていた　貴族だったが　曽祖父の頃より　財政が思わしくなく　家は、傾く一方だった。
夫との結婚も　家の存続を賭けた　政略結婚。
爵位（しゃくい）を求めた　夫側の親族と援助を求めた　わたくし側の親族との間に契約が成されたのだ。
本人の意向は、全く　関係なく勧められた為　夫も、好き勝手にしていた。
ただ　違うのは、わたくしの想いだけ……。

けれど　そんな　わたくしの心の支えになってくれる人はいた。
彼女の存在がなければ　わたくしの心は、本当に壊れてしまっていたかもしれない。
それは、恐れ多くも　この国の王太子妃様だったのだけれど……。
彼女は、自分の身分を笠（かさ）にすることもなく　とても　親しみ深い方だった。
わたくしの事情を知ってからは、いつも相談に乗ってくださったし
　悪意の満ちた　視線や噂からも守って下さったのだ。
そして　まるで　定められた運命だったかのように　わたくしは、王妃となった　彼女の要請にて　王太子様の乳母（ナニー）となった。
最初は、夫にもその他の親族にも反対されてしまったけれど……。
だって　わたくしがお世話を扱うように言い渡されたのは、世間一般で　王と寵姫の子であり　王位継承権を持たない　後ろ盾のない王子だったのだ。

そして　その後　不幸にも　王妃様は、不慮の事故で亡くなられてしまった。
何があったのかは、誰にもわからない。
同じく居合わせた者達は、誰1人として　生き残らなかったのだから。
そして　王は、悲しむこともなく　寵姫に申し分のない後家人を与え　王妃の座に据えてしまったのだ。
わたくしが、唯一　王子に出来ることは、世間の悪意から守ることだけだった。
新しい王妃様になってからは、王宮で働く者達も　一掃され　本当(前)の王太子(王妃様の子)を守る者は、悉く(ことごと)　追い出されていったのだ。
わたくしだけは、取るに取らない者と思われていたのか　それとも　王子に近づくのが嫌だったのか　彼女は、わたくしを罠に嵌めることはなかった。
けれど　夫や親族は、それを勘違いして　わたくしが、新たな王妃様にも　重宝されていると思ってしまっていたらしい。
あんなにも　蔑ろ(ないがし)にしていたはずの　名ばかりのわたくしのご機嫌を取るようになったのだから。
夫でさえも　権力に魅力を感じたのか　わたくしに対する　待遇も変わっていた。
その頃には、身分違いの恋にも相手側からの別れに言葉によって終結を迎えていたらしい。

そんなある時　王が、戯(たわむ)れに　辺境の地より　美しい娘を連れ帰った。
勿論　王妃様は、怒り狂う。
この頃には、若く美しいことが自慢だった　彼女も、王に距離を置かれるようになっており　何かと若い貴族の娘や侍女に目移りする　王を、何度も泣きながら　諌(いさ)めようとしていたのだから。
それまでは、何とか1度や2度のお手つきで済んでいたものの　そ

の娘に対しては、執拗(しつよう)なまでに執着しており　子まで生(な)してしまったのだ。
幸い　姫君であった為に　世継ぎ問題は、起こらなかった。
けれど　王の彼女への想いは、押し留まることなく　生まれたばかりの姫君は、彼女と姫の為だけに誂(あつら)えられた　離宮にて　誰の目にも留まらないよう　守られ続ける。
その徹底振りは、王の盾となる　近衛達を交代で派遣するものだ。
新たな寵姫とそのお子見たさに　噂するが　度が過ぎると　王の怒りを買う。
それは、愛する者達を守る為に　どんなことでもやってみせるという　宣言と同じ……。
異常と思われるような様に　王宮では、王妃様の権威が失われつつあった。
今までは、王の愛情を一身に受ける　愛妃として　登りつめた地位にいたのだから。
それが、後から現れた　美しい寵姫により　揺るがされようとしている。
権力を美貌(びぼう)で手に入れた彼女にとっては、屈辱でしかないだろう。

ある時　わたくしは、王の側近に呼び出された。
そして　その内容を聞いて　　驚きを隠せなかったことを、今でも覚えている。
何と　それは、離宮にて　寵姫様の話し相手兼姫君の世話役になってほしいとの要請だったのだから。
なぜ　わたくしに白羽の矢が立ったのかは、わからない。
しかも　離宮には、王子と子供達を連れて行ってもいい　との話なのだから。
けれど　この出逢いが、今の王子達の信頼関係を結んだのだ。
初めてお会いした　寵姫様は、前・王妃様に面影の似た　美しい女

性だった。
彼女の胸に抱かれた　姫君も、王子とよく似ており　とても　愛らしい顔立ちをしており　既に喧嘩友達となっていた　王子と我が子達にも好感を持たれていたのだから。
けれど　寵姫様は、何かに疲れたご様子で　儚い笑みを浮かべるだけ。
理由(ワケ)は、彼女が離宮に連れて来られてから仕えているらしい　侍女に聞いた。
何でも　寵姫様には、王に王宮に連れてこられる前に　夫がいたそうなのだ。
しかも　その方との間には、子がおり　無理やり連れてこられてしまったらしい。
寵姫様は、何度も王に　家に帰してほしい　と　懇願(こんがん)するも　無碍(むげ)にされつつあるとか。
この話を聞いて　わたくしは、王の心境がわからなかった。
愛する男性と子がいる相手を、無理やり連れてくるなど　王の所業なのか　と。
そして　寵姫様は、心労がたたって　出逢って数年で　亡くなられてしまう。
王の嘆きは、それは　それは深かった。
拍車が掛かるようにして　何かに没頭するようになられ　跡継ぎである　王太子殿下の所業も、目に余るようになる。
こうして　運命の時は、迫りつつあった。
わたくしがお世話した王子や彼の魅力に導かれた我が子やその他の者達は、着々と　成長をし続ける。
時には、ちゃんと　反省するまで叱り　甘やかすことも……。
子供達は、大人になっていくに連れて　様々なことを理解し　吸収していった。
あんなにも無邪気にはしゃいでいた　あの子達は、もう　立派に独り発ち出来る年齢に……。

願わくは、皆が幸せになってほしい……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3827o/

The girl who does a trip

2011年9月1日04時51分発行